

資 料

障害者に対する看護学生の態度に関する研究
—直接的接触体験の影響—

岩田 みどり*

A Study on the Attitude of Nursing School Students
toward the Handicapped
—The Effects through Direct Contact—

IWATA Midori

キーワード：直接的接触、入学動機、障害者に対する態度

Key Words：Direct Contact, Motivation of Entrance, Attitude with the Handicapped

I. はじめに

近年、文部科学省では学校教育における知識伝授型教育を見直し、初等教育から体験学習を積極的に取り入れようとしている。中でも障害者との交流体験を含むボランティア体験も増えており、従って看護教育を受ける学生も、入学前に障害者と接した学生は、着実に増えていくと思われる。

そこで、看護学生が障害者と直接的に接触することにより、障害者に対してどのような認識を持つのか、また過去の体験からの影響を受けるのかを明らかにしたいと考えた。はじめに、看護学生の入学前における障害者との接触状況や、その体験が入学動機にどの程度影響しているかを調べ、次に入学後1年目の障害者に対する態度を障害児・者に対する多次元的态度尺度を用いて調査し、それぞれの関連を分析したので報告する。

II. 障害理解に関する先行研究

障害理解に関する研究は、教育学・特殊教育などの分野において多数行われていた（山本,1997）。1970年以前に行われた教育学分野の研究には、一般社会人と教育関係者との障害者に対する認識の違いについて調査されており、障害に関する限定された情報や情報不足が指摘されていた（伊藤,1967；三沢,1969）。また、1980年代には、交流教育が推進されたことから、交流教育の学習効果に関する研究が多くみられた（河内,1979；木船,1986）。1990年代の文献では、著書を除いて193件の障害理解に関する研究論文があげられており、また同年に障害理解研究会が発足していた。著者がこのリストを検討し、テーマに「障害者のイメージ」、「態度変容」、「意識（偏見）」を使用し、調査研究が行われている文献を分類してみると約25%を占めて

*日本赤十字武蔵野短期大学

受理：平成14年2月20日

いた。その中で、1991年に徳田が開発した障害児・者に対する多次元の態度尺度（以下態度尺度と略す）を用いた研究も多く、講義・ビデオ・直接的接触体験など様々な教授方略による障害理解状況について、保育士や社会福祉関係者などを対象に、態度尺度を用いた調査が行われていた（福島,1986；徳田,1990；徳田,1991）。

一方看護学分野の研究では、看護学生の障害者に対する態度を客観的に測定する手段を用いて分析した報告はなく、施設内実習の報告が主であり、看護学生の交流・統合教育といった過去の体験からの影響や、施設以外での障害者との接触からの影響は充分調査されていない（中重,1989；上野,1990；岡本,1985）。また、看護教育の各分野別における報告にとどまっていた。

著者が障害理解に関心を持ったのは、小学校時代に始まり中学生時代には失語症になった家族との接し方に戸惑った経験があり、リハビリテーション施設への面会経験などが看護学校進学への動機に繋がった。現在の看護学生は、入学前の体験学習によって様々な体験を持っているものの、入学後は社会復帰した障害者と接触する機会は少ない傾向にある。また、看護学生の中には、臨地実習で障害者に接する際に戸惑いを示すものもみられる。看護学生が看護の対象との関係で戸惑いを感じるのは、障害者だけではなく乳幼児や高齢者である場合もある。今回の研究では、ライフコース別の枠組みに囚われず、障害という枠組みで学生がイメージする対象への態度について検討し、入学前の体験学習や看護学校への入学動機との関連を知りたいと考え取り組んだ。

将来は、福祉教育が初期の学校教育から導入される時代となり、障害者に対する体験学習を経験した看護学生が確実に増えてくる。障害を持つ人との直接的接触から何を学んでいたのかを明らかにしておくことは、看護教育を学ぶ上での準備性を把握することになり、看護の対象である人間の理解にも深く関係すると考える。

Ⅲ. 用語の定義

本論文で用いる障害・障害理解については、

次のように定義した。障害は、WHOが提唱する国際障害分類第2案の概念モデル（佐藤, 1998）に示された身体機能・活動・参加・背景のそれぞれ4因子に生じる制約の全体を障害とした。また、障害理解は、4因子全体に生じる制約を理解する事とした。

次に、直接的接触とは、山内（1997,p27）の提案した「接触体験の分類」を参考にして、次のように定義した。直接的接触とは、「テレビ・本・見学などの間接的情報ではなく、障害者との相互作用の体験および体験から得た直接的体験のこと」とした。

Ⅳ. 研究目的

看護学生の看護学校入学前における障害者との接触体験や入学動機との関連を調べ、入学後年目の障害者に対する態度との関連を明らかにする。

Ⅴ. 研究方法

A. 対象

調査への承諾が得られた看護系短期大学の2年生114名（回収率89.6%）。男性2名、女性112名。平均年齢：20.3歳。

B. 調査時期

1999年4月～6月。

C. 調査方法

1. 調査校の責任者に研究の趣旨を説明し、学生に対する説明や配布の時間を許可してもらった。
2. 入学前後における障害者との接触状況・学生との関係・入学動機との関係について質問紙および態度尺度の調査を実施し、各学生に提出を依頼した。

D. 分析方法

態度尺度を用いて、直接的接触体験別・入学動機との関係別・学生との関係別に態度尺度の各次元ごとの差を検定した。なお、態度尺度は、①否定的態度②統合教育③特殊能力④自己中心性⑤交流の当惑の5次元から構成され、表1に示

すとおりの、全体で50項目の設問で構成されている。回答方法は7段階尺度 (1. 非常に賛成-7. 非常に反対)から選ぶ。また態度尺度は妥当性・信頼性が検証されており、得点が低いほど障害者に対する態度が肯定的と判定される (表2)。

VI. 結果

A. 入学前後の直接的接触状況

1. 直接的接触体験の状況

入学前の直接的接触体験の状況 (図1) は、交流教育 40.4%、統合教育 11.4%、看護体験

51.5%、その他20.2%であった。また入学前後における障害者との直接的接触は72.8%の看護学生が体験しており、入学後は58.7%で入学前の方が多かった。

2. 障害者の障害種別

看護学生が入学前に接した障害者の障害種別 (図2・重複回答) は、入学前は、「知的障害」32.1%、「身体障害」24.6%、「聴覚障害」13.9%、「精神障害」8.6%、「視覚障害」8.0%、「内部障害」8.0%、「自閉症」3.2%、「その他」1.0%の順であった。入学後は、「身体障害」25.5%、「知的障害」21.2%、「精神障害」

表1. 障害児・者に対する多次元的态度尺度の設問一覧

| 設問 | 設問 |
|--|--|
| 1. 障害のある人と一緒に仕事がしてみたい | 27. 障害のある子どもは事情が許せば普通学校に入ったほうがいい |
| 2. 障害のある子どもも普通の学校で教育するのが一番いい | 28. 障害のある人はない人よりも忍耐力があるというわけではない |
| 3. 障害のある人は超能力を持っているわけではない | 29. 障害のある人の態度は控えめで謙虚である |
| 4. 障害のある人は相手のことをよく考えて物事をいう | 30. 障害のある人も自分と同じ世界に生きている |
| 5. 障害のある人にも気軽に声をかけられる | 31. 障害のある人は施設で生活するより社会の中で生活するほうがいい |
| 6. 障害のある人と積極的に交流したい | 32. 障害のある子どもは普通学校の中で安全に生活することができる |
| 7. 普通学校でも障害のある子どもも充分教育することができる | 33. 障害のある人がない人が感じていないことまでわかってしまうということはない |
| 8. 障害のある人はあまり敏感でない | 34. 障害のある人はいつも他人の援助を待っているわけではない |
| 9. 障害のある人は手伝ってもらうことをあたりまえと思っていない | 35. 障害のある人とコミュニケーションが取れる |
| 10. 障害のある人にためらいなく、ものをたずねることができる | 36. 障害のある人はすべての面で劣っているわけではない |
| 11. 障害のある人と喜びや楽しみを分かち合うことができる | 37. 障害のある子どもは普通の学校のほうが個性を伸ばすことができる |
| 12. 障害のある子どもは普通の学校に入ること多くの経験をするることができる | 38. 障害のある人もない人も記憶力は同等である |
| 13. 障害のある人はない人よりも感覚が優れている | 39. 障害のある人は援助がなくても多くのことができる |
| 14. 障害のある人は決して自分の境遇に甘えているわけではない | 40. 障害のある人と付き合うときは気を使すぎない |
| 15. 障害のある人を見ると迷わず手を貸すことができる | 41. 障害のある人の慈善事業は福祉に任せるだけではない |
| 16. 障害のある人を自分達の仲間に入れることに抵抗はない | 42. 障害のある人に適した授業は普通学校でできる |
| 17. 障害のある子どもは普通の学校で教育を受けることが望ましい | 43. 障害のある人は他の人が考えていることを敏感に感じ取れるわけではない |
| 18. 障害のある人が特に我慢強いわけではない | 44. 障害のある人はいろいろなことに希望をもっている |
| 19. 障害のある人は空想でものを言うことはない | 45. 障害のある人に変な遠慮はしない |
| 20. 障害のある人と抵抗感なく話ができる | 46. 障害のある人と友人になりたい |
| 21. 障害のある人に部屋を貸すことができる | 47. 障害のある子どもを普通学校に入れるとお互いの理解が深まる |
| 22. 障害のある子どもは普通学校の中で活動することができる | 48. 障害のある人は話し相手の性格や心の中を理解する特別な能力を持っているわけではない |
| 23. 障害のある人が、人並み以上の芸術的才能をもっているというわけではない | 49. 障害のある人はいつもきちんとしている |
| 24. 障害のある人は他人に対して親切である | 50. 障害のある人に関心がある |
| 25. 障害のある人が困っているとき迷わず援助することができる | |
| 26. 障害のある人と楽しく生活することができる | |

21.2%、「聴覚障害」12.4%、「内部障害」12.1%、「視覚障害」8.0%、の順であった。つまり、「精神障害」と「内部障害」を持つ人との接触では入学後の方が多かった。

3. 障害者との関係

看護学生と直接的接触を持った障害者との関

係(図3・重複回答)は、入学前では「ボランティア」22.9%、「話した程度」18.0%、「知人」12.3%、「友人」10.7%、「家族」5.7%、「親戚」4.9%、「その他」25.4%であった。入学後の関係では、「担当患者」30.7%、「ボランティア」15.9%、「家族」5.7%、「親戚」5.7%、「知人」

表2. 多次元的态度尺度の各次元の内容と評定

| 次元 | 次元の内容 | 評定 |
|-------|--|------------------------------------|
| 否定的態度 | 生活の全体、特に職業や娯楽などに関して障害児・者をどの程度拒否するか、また障害児・者の能力をいかに低く評価しているかを測定する。 | 高得点であるほど否定的態度が強い。 |
| 統合教育 | 統合教育に対する賛成の程度を測定する次元である。 | 高得点であるほど統合教育に反対する傾向が強い。 |
| 特殊能力 | 障害児・者には一般の人が持っていない特に優れた能力が備わっているという考えをどの程度持っているかを示す。 | 高得点であるほど特殊な能力を持っていると考えている傾向が強い。 |
| 自己中心性 | 障害児・者はその境遇に甘え、手伝ってもらふことを当然のこととして考えている程度を示す。 | 高得点であるほど障害児・者が自己中心的であると感じている傾向が強い。 |
| 交流の当惑 | 障害児・者との接触や交流において戸惑う傾向を表す次元である。 | 高得点であるほど当惑する傾向が強い。 |

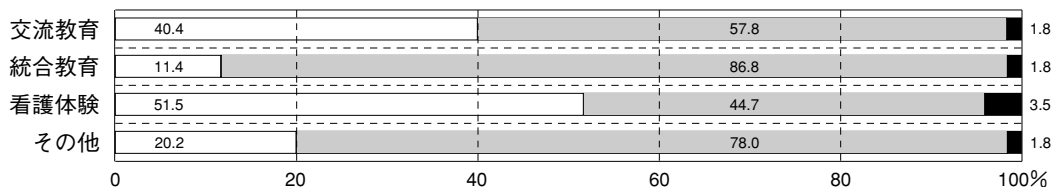


図1. 入学前の直接的接触体験の状況 (重複回答) □あり ■なし ■無回答

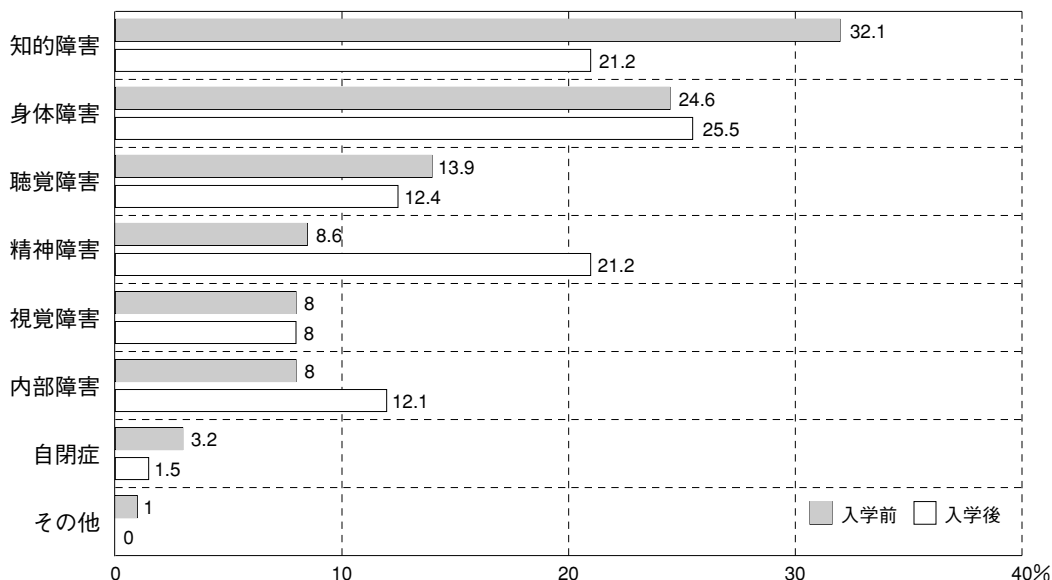


図2. 学生が入学前に接した障害者の種別 (重複回答)

4.5%、「友人」3.4%、「その他」30.7%であった。「その他」が占める割合が多くなった理由として、担当患者ではないが、実習の際に関わったので「その他」を選んだとする記載が1名みられ、回答しづらかったためと考えられる。また「ボランティア」については入学前が最も多く、入学後の方が減少していたが、それでも約16%の看護学生がボランティアとして接触していた。

4. 直接的接触の内容

入学前後の障害者との直接的接触の内容については、入学前では「遊んだ」34.5%、「お世話をした」19.9%、「生活を共にした」18.7%、「一緒に勉強した」14.0%、「その他」12.9%の順であった。入学後では、「お世話をした」34.6%、「遊んだ」26.0%、「生活を共にした」26.0%、「一緒に勉強した」6.7%、「その他」6.7%の順であった。このように、障害者との直接的接触の内容で、最も多いのは入学前では「遊んだ」であり、入学後では「お世話をした」と

いう状況であった。

B. 看護学生の入学動機との関連および障害者との関係

看護学生114名の障害者への関心度について調べたところ、「関心あり」35.0%、「やや関心あり」53.5%、「やや関心なし」8.8%、「関心なし」0.9%、「無回答」1.8%、で88.5%の看護学生が関心ありと回答していた。次に入学前に障害者と接したことのある83名の看護学生に、入学動機との関連を調べたところ、「関連なし」8.4%、「やや関連なし」48.2%、「やや関連あり」27.7%、「関連あり」3.6%、「無回答」12.0%であり、障害者との直接的接触が入学動機と関連した看護学生は31.3%であった。

入学動機と関連した看護学生26名の障害者との関係（図4）では、「ボランティア」29.5%、「友人」14.7%、「親類」11.7%、「家族」8.8%、「知人」8.8%、「話した程度」8.8%、「その他」8.8%であった。

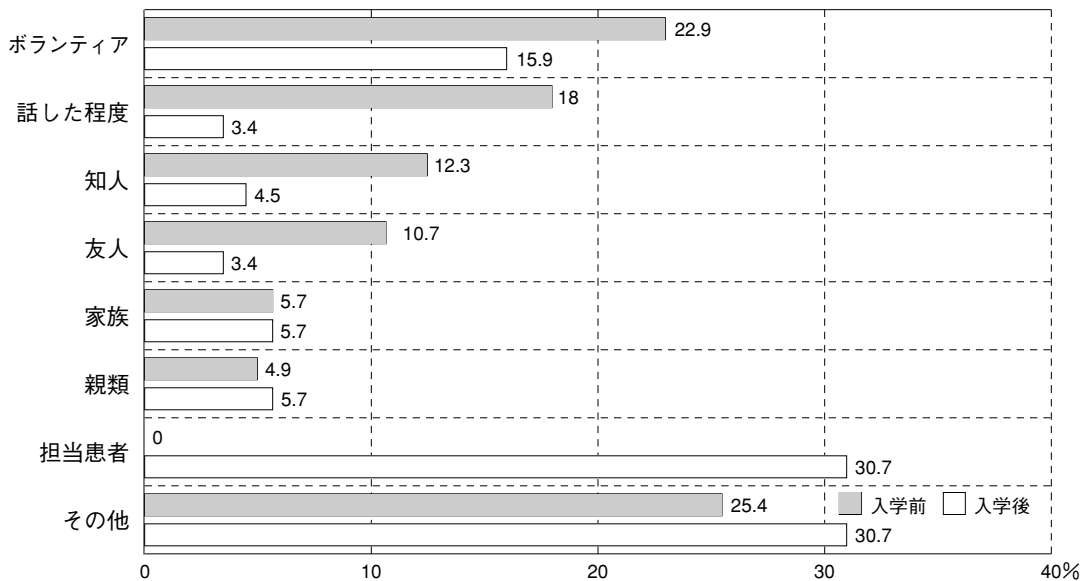


図3. 学生と直接的接触を持った障害者との関係 (重複回答)

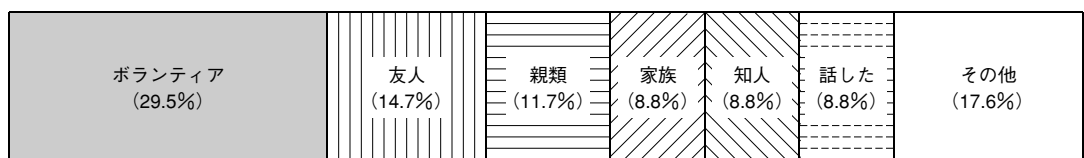


図4. 入学動機と関連した学生の障害者との関係

N=26

17.6%であった。以上のように障害者との関係では、身近な者としての関係よりもボランティアのほうが多かった。また、入学動機と関連した看護学生の接した内容では、「遊んだ」30.6%、「生活を共にした」25.0%、「お世話をした」22.2%、「一緒に勉強した」16.6%、「その他」5.5%で、「お世話をした」よりも「遊んだ」が多かった。

C. 態度尺度と直接的接触・入学動機との関係 (表3)

1. 看護学生の特徴

看護学生114名の態度尺度得点の平均は、「否定的態度」26.9、「統合教育」31.5、「特殊能力」36.4、「自己中心性」33.8、「交流の当惑」30.7、であった。これは、徳田 (1991,pp33-38) の調査した一般人 (大学生および社会人) 86名の研究結果と比較すると「自己中心性」以外は、一般人より看護学生の方が低値であり、「交流の当惑」<「統合教育」<「否定的態度」<「特殊能力」の順で、看護学生の方が肯定的傾向であった。特に「交流の当惑」が最も大きな差を示しており、看護学生は障害者との交流に戸惑いが少ない。

2. 入学動機との関係

入学前の障害者との直接的接触が入学動機に関連した看護学生26名の態度尺度平均は「否定的態度」22.8 ($p<.001$)、「交流の当惑」27.1 ($p<.01$)、「統合教育」28.1 ($p<.05$)、で有意な差があり、態度尺度の平均は低値で、看護学生

の態度は肯定的であった。「自己中心性」の次元も肯定的な傾向であったが、「特殊能力」の次元のみ否定的傾向であった。つまり、入学動機と障害者との接触が関連していた看護学生では、「特殊能力」では障害者は特別とする傾向がみられた。

3. 直接的接触との関係

障害者と直接的接触を持った看護学生96名の態度尺度平均は「否定的態度」の次元のみ低値で肯定的な傾向があるが、「特殊能力」37.1 ($p<.05$) では逆に有意に高値を示し否定的で、他の次元もほとんど差はみられず全体的な傾向は捉えられなかった。

4. ボランティア体験との関係

入学前に直接的接触の体験がある83名のうち重複回答の6名を除く77名では、より身近な関係であるボランティア体験を持った看護学生 (家族に障害者がいる看護学生を含む) と、体験のない看護学生で比較してみたところ、態度尺度の平均が全体的に低値を示し、肯定的傾向がみられた。

VII. 考察

今回、看護学生の入学前における障害者との接触状況を調査した結果、入学前に看護学生が障害者と直接的接触体験を持っている割合は7割と予想以上に高く、今後福祉教育が初等教育課程から進められると、さらに増加することが予

表3. 態度尺度と入学動機・直接接触の関係

| 項目・人数 | 態度尺度 | 否定的態度 | | 統合教育 | | 特殊能力 | | 自己中心性 | | 交流の当惑 | | |
|---------|----------|--------|------|--------|------|------|------|-------|------|-------|------|-------|
| | | MEAN | SD t | MEAN | SD t | MEAN | SD t | MEAN | SD t | MEAN | SD t | |
| 一般人 (注) | N=86 | 32.6 | — | 39.9 | — | 36.8 | — | 31.4 | — | 46.5 | — | |
| 看護学生 | N=114 | 26.9 | 7.2 | 31.5 | 9.2 | 36.4 | 8.1 | 33.8 | 5.9 | 30.7 | 8.2 | |
| 看護学生 | 入学動機 | 有 N=26 | 22.8 | 6.5*** | 28.1 | 9.2* | 38.3 | 7.8 | 32.5 | 7.1 | 27.1 | 7.2** |
| | | 無 N=59 | 28.6 | 7.0 | 33.1 | 8.9 | 36.3 | 8.1 | 34.6 | 4.9 | 32.5 | 8.3 |
| | 直接接触 | 有 N=96 | 26.6 | 7.4 | 31.7 | 9.6 | 37.1 | 7.8* | 33.8 | 5.3 | 30.8 | 8.7 |
| | | 無 N=18 | 28.5 | 6.0 | 30.1 | 6.9 | 32.6 | 8.5 | 33.7 | 8.6 | 30.3 | 4.5 |
| | ボランティア体験 | 有 N=29 | 25.5 | 7.7 | 30.8 | 9.7 | 35.5 | 10.8 | 33.0 | 7.0 | 28.8 | 8.7 |
| | | 無 N=48 | 27.8 | 7.0 | 32.3 | 9.0 | 37.2 | 7.5 | 34.3 | 6.3 | 32.2 | 8.0 |

(注) 徳田(1991,pp33-38)より

***p<.001 **p<.01 *p<.05

測される。次に障害者との直接的接触の体験は、入学後1年目と比較すると入学前の方が多かった。これは、調査対象を入学後1年目に限定したためであり、看護教育の期間全体を反映してはいない。特に直接的接触を持つ臨地実習が3年次からプログラムされる場合が多いので、今後増加するものと思われる。今回、臨地実習に入る前の入学後1年目に調査したのは、臨地実習という準備された状況における直接的接触ではなく、学生の主体的な障害者との直接的接触が、どの程度あるのかを調査したいと考えたからである。しかし、少し調査時期が遅かったこともあり、入学後の授業の影響を受けたため、調査時期は改善する必要があった。

次に徳田 (1991) が調査した一般人の態度尺度の結果と比較してみたところ、看護学生の方が障害者に対して4つの次元で肯定的な傾向であり、特に「交流の当惑」の差が最も大きかった。これらの理由としては、看護学生は看護の対象である人間に対し関心が高いこと、障害者に関する情報量が多いこと、入学前に看護体験を5割以上が経験していたこと、などから交流への自信を持っていたと考える。また看護学生であるという役割意識や入学後の学習など様々な要因が考えられる。

一方、「自己中心性」の次元は一般人より否定的な傾向であった。これは、岡本ら (1985) の調査で、実習前にボランティア体験を持った、または近所にいた・同居してた看護学生は障害者と接する際に戸惑いが少ないが、障害者を自己中心的と考えていたとする結果とも共通するが、そのまま看護学生の特徴と結論づけてよいかは疑問であった。そこで、直接的接触の体験がある看護学生と体験がない看護学生を比較したところ、体験がある看護学生に「特殊能力」の次元は否定的傾向があり、他の次元では明らかな差や傾向は見出せなかった。さらに、直接的体験の関係を岡本らと同様に、ボランティア体験や家族に障害者がいる看護学生だけに絞って検討してみたところ、「自己中心性」を含め5次元とも障害者に対する態度は肯定的傾向がみられた。すなわち、一般人の結果と比較すると看護学生は障害者を自己中心的とイメージしていると考

えることもできるが、身近な接触を持つ看護学生では、障害者を自己中心的とは考えておらず、全体に障害者に対し肯定的態度を取ると考えていたことが明らかになった。

これは、直接的接触が障害者に対して肯定的態度を形成すると報告 (丹所,1996) した結果とも共通していた。つまり、障害者から直接伝えられる情報によって、障害者の本来の力・姿を理解する機会を得て、障害者との双方向的関係を体験することが肯定的理解につながるのではないかと考える。また、今回の結果は岡本らの調査から約10年以上経過しており、障害者の社会参加もめざましく増加しつつある。看護学生が障害者に直接的に関わる中で、障害者に対する見方が変化しつつあることが推察された。

次に、看護学生と障害者との関係では、家族・親戚・友人よりもボランティアの割合が多かった。これは核家族化が進む中で、看護学生も家族として障害者と生活を共にする体験は少なくなる傾向があり、逆にボランティアなどの福祉体験の普及から障害者と接する機会を得ていると思われる。

また、今回の調査から入学前に直接的接触のある看護学生のうち、接触が入学動機に関連した看護学生は約3割みられ、入学動機に関連しなかった看護学生と比べると障害者に対し肯定的態度をとる傾向がみられた。近年では、入学査定としてボランティア体験を持つことが有利であると考えて体験する場合があるようだが、入学審査に関係のない本調査で得た結果は、看護学生の率直な障害者に関する理解の状況と受け取ることができる。看護の対象である人間理解に関して準備性をもつ看護学生が増加することを踏まえて、入学後も過去の体験と関連づけた学習ができるようにすることは今後の看護教育の中でも重要だと考える。

今回態度尺度を用いたことで、看護学生が障害者に対し、日頃どのような態度をとるのか、看護学生の意識を具体的に明らかにすることができた。態度尺度は自己評価に基づくため、障害者との関係を客観的に示しているものではないが、看護学生自身の振り返りとして役立ち、また看護学生の障害観を理解する手掛りにもつ

ながると考える。

最後に、教育学分野でも体験学習による態度変容のプラス効果が報告されつつあるが、直接的接触の内容・関係別といった細部の影響については、まだ十分な検討は行われておらず、他分野との比較研究も含めて検討していく必要がある。

VIII. 結論

看護学生は、入学前に約7割以上の学生が障害者との直接的接触体験を持っていた。また、一般人より障害者に対する態度は肯定的傾向で特に障害者との交流に困らないと考える傾向がみられ、自己中心性の次元のみ否定的傾向であった。しかし、直接的接触の関係別ではボランティア体験のある看護学生（家族に障害者のいる看護学生を含む）の場合は、体験のない看護学生に比べ5次元全てにおいて肯定的傾向がみられ、障害者に対し身近な関係を体験した看護学生では、障害者を自己中心的と考えている傾向はみられなかった。

また、入学動機が直接的接触の体験と関連していた看護学生の方が、関連のない看護学生に比べ障害者に対して肯定的傾向がみられた。

今後は、入学前の体験を生かした学習ができるよう教授方法を工夫し、調査対象数や内容を改善し、直接的接触の内容別に質的な影響や他分野の学生との比較を検討していく必要がある。

謝辞

調査にご協力いただきました学生の皆様、並びに日本社会事業大学院の佐藤久夫教授はじめ諸先生のご指導に深く感謝いたします。

なお、この論文は第27回看護研究学会で一部を発表しています。

文献

福島佳子他(1986). 心身障害児(者)に対する中学生の意識. 横浜大学教育学部紀要, 26, 205-223.

伊藤隆二他(1967). 心身障害児に対する社会人の態度(偏見)に関する研究. 特殊教育研究, 5, 1-13.

河内清彦(1979). 視覚障害者(児)に対する学生および教師の態度—態度構造について. 特殊教育研究, 17(2), 19-32.

木船憲行(1986). 精神薄弱児に対するふつう児の態度と交流経験との関係. 特殊教育研究, 24, 11-19.

三沢義一他(1969). 身体障害者(児)に対する一般人の態度について. 三重大学教育学部研究所紀要, 42, 43-58.

中重喜代子他(1989). 福祉施設実習における学生の学び. 東京女子医科大学看護短期大学紀要, 10・11, 105-112.

岡本佳子他(1985). 看護学生の障害者に対する態度の研究. 福井県立短期大学紀要, 9, 73-83.

佐藤久夫(1998). WHO国際障害分類の改正動向と1998年東京会議. 障害者問題研究, 26(1), 1-8.

徳田克己他(1990). 障害児・者に対する態度を測定するための多次元的態度尺の開発(1)—全体構成の妥当性の検討—. 桐花教育研究所紀要, 3, 21-29.

徳田克己(1991). 障害児・者に対する態度を測定するための多次元的態度尺度の開発(2)—再テスト法による信頼性の検討と態度変容活動の評価への応用—. 桐花教育研究所紀要, 4, 33-38.

丹所忍他(1996). 障害者スポーツに関する大学生の認識—視覚障害者のスポーツを中心として—. 障害理解研究, 1, 61-66.

上野玲子他(1990). 看護学科学学生における重症心身障害児実習の意識. 弘前大学医療短期大学紀要, 14, 1-9.

山本哲也(1997). 障害理解関係文献一覧. 障害理解研究, 2, 83-94.

山内隆久(1997). 偏見解消の心理—対人接触による障害者の理解—. ナカニシヤ出版.